

称号及び氏名	博士（農学）細野 賢治
学位授与の日付	平成 17 年 2 月 20 日
論 文 名	「和歌山県有田地域におけるミカン産地の形成と展開に関する研究 - 環境変化のなかでの産地の維持方策と展開方向 - 」
論文審査委員	主査 教授 小林 宏至 副査 教授 前中 久行 副査 教授 堀内 昭作 副査 助教授 大西 敏夫 副査 講 師 藤田 武弘 主任研究員 辻 和良 (和歌山県 農林水産総合技術センター)

論文要旨

序章 研究課題と方法

わが国のミカン農業は、戦前から商業的農業の典型とされ、戦後の基本法農政下では選択的拡大部門に位置づけられた。そして、高度経済成長期における果実需要の増大やコメ過剰による水田転換作物としてのミカンの位置づけなどを背景に、ミカン農業は飛躍的に成長した。しかし、低成長期に移行すると供給過剰による価格暴落などから縮小・再編局面に突入した。その後、高品質果実の多品目少量消費への移行、果実輸入の増大、川下におけるスーパーの台頭といった産地外部環境の変化が起こった。とりわけ、1990年代半ば以降の川下主導による流通再編が産地に与えるインパクトは強く、スーパーは、「仕入ロットの大型化」と「こだわり商材」といった2つの要求を産地に求めている。

一方、ミカン産地では収益性の低下と担い手の高齢化・後継者不足が顕在化している。産地では、このような内部環境のもとで高品質果実を生産することが必要となり、「家族労働の軽減」と「一層の労働集約化」といった経営志向の二極化が進んでいる。このような状況においてミカン産地の維持方策を検討することは、わが国における商業的農業の発展に重要な示唆を与えるであろう。

本論文は、ミカン農業を取り巻く環境変化と産地間競争の構造変化のなかで、

ミカン産地の維持方策と展開方向を検討することを目的とする。そのため第 1 に、江戸時代から産地形成がなされ商業的農業の先進的存在であった和歌山県有田ミカン農業を取り上げ、産地の形成過程と生産・販売構造を分析し、ミカン産地を維持・存続することができた諸要因を検討する。そして第 2 に、有田地域における多様なミカン販売主体の生産・販売対応を分析し、スーパーの仕入ニーズの多様化と農家における経営志向の二極化が進むなかでミカン農業を維持していくための産地のあり方を考察する。

第 1 章 ミカン産地の形成過程と環境変化に伴う産地対応

基本法農政以降のミカン農業は、1960 年代前半から 1970 年代半ばまでの「成長期」、1970 年代後半から 1980 年代後半までの「過剰・転換期」、1990 年代前半から 1990 年代半ばまでの「成熟期」、1990 年代後半以降の「川下主導再編期」の 4 つの画期に分けることができる。とりわけ「川下主導再編期」では、スーパーが大型ロットによる定時・定量・定品質仕入への要求を強め、他方では個性的な生産・選別方法を差別化の対象とした「こだわり商材」への要求を強めている。

これら 4 つの画期に基づいてミカン産地の展開過程をみると、「成長期」は全国的にミカン産地が拡大し、とりわけ佐賀県・熊本県など後発的な産地においては、農協組織の主導により大規模産地が育成された。「過剰・転換期」には、農協組織が産地形成の主体であった愛媛県、佐賀県などでは、水田転換ミカン園などの不適地を中心に他品目への転換が積極的に行われた。一方、全国的にミカン農業が縮小傾向をみせるなか、和歌山県では、伝統的なブランド性や産地の歴史的特性などから栽培農家数および栽培面積の減少幅は小さく、価格面での優位性を確保してきた。

「成熟期」には全国的に温州ミカン価格が上昇し、産出額が増加し他ものの、「川下主導再編期」には再び全国的にミカン価格が低迷するなかでスーパーが産地への要求を強めたことで産地間競争の様相が変化し、販売ロット大型化と高品質化を積極的に進める熊本県や静岡県などにおいて優位性が高まっている。和歌山県は、これまでの伝統的なブランド性がこれらの対応を遅らせたため、価格面での優位性を低下させている。しかし、このような状況でも和歌山県はミカン栽培農家数および栽培面積の減少幅は比較的小さい。和歌山県のミカン生産・販売構造は、県内の温州ミカン産出額の 6 割近くを占める有田地域に規定されてきた。和歌山県におけるミカン産地維持の要因を検討するために、有田地域におけるミカン産地の状況を分析する必要性を指摘した。

第 2 章 有田地域におけるミカン産地の形成過程とその特徴

有田地域は、京阪神に近く温州ミカンの露地栽培に適した自然（地形・気候・土壌）条件から、古くからミカンの銘柄産地として展開してきた。また当地域は、江戸時代から遠隔大消費地（江戸）へ出荷を行うなど商業的農業の先進地であった、戦前から自作地の比率が高く戦後も商業的農業としての先進性を維持した、農家・集落主体により産地形成が行われた、という歴史的特質を持つ。このため、当地域は伝統的なブランド性に依拠してミカン農業を展開し、農協によるミカン販売組織の合併・大型化が進むなかでも多数の小規模販売主体（集落共販組織、個選による輸送共同組織、個人出荷者）が存続している。

有田地域が温州ミカン栽培農家数および栽培面積を維持している要因として、伝統的ミカン産地としての歴史的特質と、それに起因する多様な販売形態の存在が専業農家から高齢・兼業農家まであらゆる階層のミカン生産・出荷の受け皿となっていることを指摘した。

第3章 有田地域における大型共販組織のミカン生産・販売対応

本章では、大型農協共販組織のミカン生産・販売対応を分析した。有田地域に存在する3つの大型農協共販組織は、温州ミカン年間販売量1万t以上の規模であり、光センサーなどの新選果システムの導入、「味ーみかん」や「完熟みかん」など個性化商品に対する取組、園地台帳に基づく綿密な営農指導、

川下サイドの詳しい情報の提供、などを行ってきた。これらは、スーパーの仕入ニーズである高品質果実の大型ロットによる定時・定量・定品質販売、生産者ニーズである選別・出荷作業にかかる労働力の省力化、客観的な品質評価とそれに基づく代金精算などに対応した取組である。

有田地域において農協共販組織が出荷者を拡大させている背景には、資本力に劣る小規模販売主体では実現困難と思われる上述の取組を行うだけの、総合農協の組織的・財政的基盤が指摘できる。特に、高品質生産を企図しながら家族労働の省力化を望む出荷者が、客観的な品質評価、ロットの確保、情報提供や代金回収面において、農協共販組織に対する評価を高めていることが注目される。

第4章 有田地域における小規模販売主体のミカン生産・販売対応

本章では、有田地域の小規模販売主体のミカン生産・販売対応を分析した。当地域では、従来から経営意欲の高い農家は、集落共販組織・個選による輸送共同組織や個人出荷者といった小規模販売主体による出荷を行ってきた。その要因は、当地域の伝統的なブランド性から、農家・集落による個別的な販売の方が有利と捉えていた、高価格販売を実現してきた農家・集落において資

本蓄積がなされたため、選果施設の更新を自己資金で行うことができた、などである。しかし、近年はミカン農業の収益性低下や担い手の高齢化・後継者不足、選果施設の更新時における資金面での問題などから、小規模販売主体が縮小傾向にある。

このようななか、現在も存続している小規模販売主体は、「こだわり商材」ニーズの高まりのなかで、早生温州の完熟型出荷やマルチドリップ栽培などの労働集約的な生産と徹底した栽培管理、生産意欲の高い労働力の確保といった「個性的な生産・販売対応」を実現している。またこれらは、生産者が販売先のニーズを直接把握しながら、大型組織の隙間をねらったニッチ対応のマーケティングを行っていることが特徴である。小規模販売主体であっても「こだわり商材」対応や出荷先との関係強化などによって組織の維持・存続できることが明らかとなった。

終章 総括

有田地域のミカン農業は、露地栽培に適した自然条件、大消費地に近いという立地特性と、農家・集落主体による産地形成、商業的農業の先進地としての性格を戦後も維持できたという歴史的特質をもつ。全国的に農協による販売の大型化が進むミカン農業であるが、当地域はこのような伝統的なブランド性から多様な販売形態が存在しつつ産地間競争を優位に展開してきた。「川下主導再編期」には対応の遅れから価格面での優位性を低下させたが、温州ミカン栽培農家数や栽培面積の減少幅は他の主産地に比べて小さい。

この要因は、有田地域において「大規模・大型化」販売主体と「小規模・個性的」販売主体が併存し、ミカン生産・販売における「重層的市場対応」が実現されているところにある。すなわち、「一層の労働集約化」を志向する農家は小規模販売主体により労働集約的な生産・販売を継続し、「家族労働の軽減」を志向する農家は大型農協共販組織を通じて販売し生産意欲を維持している。そして、小規模販売主体が運営を継続できなくなった場合には、大型農協共販組織がこれらの出荷者を吸収することで地域内の生産・出荷量を維持してきた。また有田地域は、スーパーの「仕入ロットの大型化」ニーズに対しては大型農協共販組織の「大型化」対応で、「こだわり商材」ニーズに対しては小規模販売主体の「個性的」対応でというように、産地全体として両者への対応が可能となっている。

以上の検討を踏まえて、「川下主導再編期」においてミカン農業を維持するためには、産地において大型化対応と個性的対応が併存する「重層的市場対応」を構築することが肝要であると考えられる。したがって、農協共販組織が中心の産地においては、「一層の労働集約化」による高品質生産での「こだわり商材」

対応を志向する農家に対する受け皿を確保するなど、農協共販体制のなかで重層的な生産・販売対応を行うことが求められる。また、有田地域のように多様な販売主体によって重層的な生産・販売体制が確立された産地では、各ミカン販売主体の特性を生かしながら、農家、ミカン販売主体および行政との連携体制を構築し、産地全体として統一的な生産・販売戦略を確立する視点から、農協が指導力を発揮することが問われている。

審査結果の要旨

わが国のミカン農業は戦前・戦後を通じて飛躍的な成長をとげた。しかし、高度経済成長の終焉とともに到来した過剰=価格暴落を機に縮小・再編局面に突入し、その後は果実輸入の増大、川下におけるスーパーの台頭など、ミカン農業をめぐる環境変化はきわめて激しい。とりわけ川下主導による流通再編が産地に与えるインパクトはきわめて強力で、その中核たるスーパーが産地に求める要求は、「仕入ロットの大型化」をはじめ「安全・安心」、「味・おいしさ」等々、多面的である。また、ミカン産地では収益性の低下と担い手の高齢化・後継者不足が顕在化し、一方では「家族労働の軽減」、他方では「一層の労働集約化」という経営志向の二極化が進展している。

本論文の目的は、ミカン農業の先進地として知られる和歌山県有田地域を対象に、ミカン産地の形成・展開過程の特質を分析するとともに、産地の維持方策と展開方向を考察するところにある。

序章では、有田地域の特質にもとづく課題について、有田ミカン農業は江戸時代から産地形成がなされ、明治以降も戦前・戦後を通じて商業的農業の先進的存在であり続け、しかも全国的なミカン産地の縮小局面にあっても変動幅が極めて小さいこと、同地域には多様なミカン販売主体が存在し、この主体はスーパーの求める要求実現の担い手と関わって考察されるべき重要な対象であること、などを指摘している。

第1章では高度経済成長期以降今日に至る時期区分として4つの画期をあげるとともに、「川下主導再編期」(現状)のスーパーの要求とは、その1つは「大型ロットによる定時・定量・定品質仕入」への対応であり、いまひとつは個性的な生産・選別方法を差別化の対象とした「こだわり商材」への対応という2つの内容からなることを指摘している。

次に、既存統計により、各画期におけるミカン主要産地の展開動向を分析し、ミカン栽培農家数および同栽培面積の全国的激減局面にあつて、和歌山県の減少幅は極めて小さく、しかも同県では1990年頃まで価格優位性が維持されてきたこと、1990年代中期以降の「川下主導再編期」において、販売ロット大型化と高品質化を積極的に進める熊本県や静岡県では価格優位性が向上しているが、和歌山県の優位性はもはや喪失していること、和歌山県のミカン生産・販売構造は同県の温州ミカン産出額の6割近くを占める有田地域に規定されていること、などを指摘している。

第2章では有田ミカン産地の特徴について、その自然的経済的立地条件と歴史的特質を指摘するとともに、農協傘下なる形態でミカン販売組織の合併・大型化が進展していることを指摘する一方において、歴史的に形成された多数の小規模販売主体(集落共販組織、個選による輸送共同組織、個人出荷者)が並存する現状をあげ、これら立地的・歴史的特質と多様な販売形態の並存が専業農家から高齢・兼業農家を含むあ

らゆる階層でのミカン生産・出荷の受け皿となっていることを指摘している。

第3章では有田地域における大型共販組織のミカン生産・販売対応について共販3組織を具体的に分析するとともに、同地域においても農協共販組織のシェアが漸次拡大していることをあげ、総合農協には資金力の劣る小規模販売主体では困難な取組を実現させるだけの組織的・財政的基盤があることを指摘している。

第4章では有田地域に多数存続する小規模販売主体のミカン生産・販売対応を分析し、小規模販売主体は「こだわり商材」ニーズの高まりのなかで「個性的な生産・販売対応」を実現していること、生産者が販売先のニーズを直接把握して行うマーケティング等の具体的事例をあげ、小規模販売主体でも「こだわり商材」対応や出荷先との関係強化などにより、組織の維持・存続が可能である、と結論づけている。

終章ではこれまでの分析を総括するとともに、「川下主導再編期」におけるミカン農業の維持方策として、産地において大型化対応と個性的対応が併存する「重層的市場対応」を構築すること、農協共販組織が中心の産地においても重層的な生産・販売対応を行うこと、多様な販売主体によって重層的な生産・販売体制が確立された産地では、ミカン販売主体の特性を生かしながら農家、ミカン販売主体および行政との連携体制を構築すること、産地全体として統一的な生産・販売戦略を確立する視点から、農協による指導力の発揮が重要なこと、などを指摘している。

以上から、本論文は和歌山県有田地域におけるミカン産地の形成・展開過程の分析を基本に据えて、ミカン農業をめぐる激しい環境変化の中での産地の維持方策と展開方向を解明した実証的研究である。

本論文において明らかにされた諸点は、先進地とはいえ近年の研究集積は乏しいといわれる有田ミカン産地の今日的課題の解明に寄与するとともに、先行のミカン農業論、地域農業（再構成）論、農協論等々の研究に新知見を付加するものである。学力確認の結果と併せて、博士（農学）の学位を授与することを適当と認める。